

岡山大学における環境管理センターの位置づけ

岡山大学長 大藤 眞

昭和50年9月に特殊廃水処理施設，昭和52年12月に有機廃液処理施設が竣工し，昭和53年7月にこれらが統合されて環境管理施設となり，爾来全学の有機系・無機系廃液の処理センターとして活躍してきました。一方，法改正による昭和56年以降の水質総量規制に対応して，急遽昭和56年12月に津島地区の排水基幹工事に着手し，昭和59年8月に全工程が完了しました。これに先立ち，これまでの環境管理施設に洗浄・生活の排水部門を加え，さらに技術開発室をおいた環境管理センターが昭和57年6月に設立されました。以上の経緯のとおり，本学の環境管理の施設は，昭和50年に着手して以来10年間にわたり着々として整備され，昨年排水基幹工事の完了をもって一応完成され，これに伴って維持管理体制も有機廃液部門，無機廃液部門，洗浄排水部門，及び生活排水部門として統合され，3年前から新たに環境管理センターとしてスタートしているのです。

したがって，この環境管理センターは，出生の体質としては現今の廃液・排水の法規制に対応して，学内の環境保全を正しく遵法的に管理運営する体制であります。これだけのセンターの業務を完遂するためには，廃液・排水の処理・分析技術その他広く環境保全に対する技術の開発研究を絶えず積んでゆかねばなりませんし，また，全学的な統制の行き届いた廃液処理を実行するための技術指導員の養成も必要であります。すなわち，前者は環境科学研究に属する専門的な研究体制の必要性を示しており，また，後者は総合大学という大規模の研究機関における環境保全の遂行のための，系統的な教育システムの必要性を示しているのです。

このうち研究面につきましては，技術開発室が幸いに財団法人日産科学振興財団の研究助成金を得て，目下廃水の処理や再資源化についての調査研究を続けておられる由であります。また教育面につきましては前身でありますところの環境管理施設の頃から廃液処理に関する全学的な技術指導員制度が設けられ，毎年講習会を行って技術指導員の認定・登録が行われ，現在のセンターとなりましてからも毎年講習会が続けられております。また，学生・院生による施設の見学・実習は年々盛んとなり，センターとなりましてからは各学部からの見学・実習が年々増加してきており，センターの現状からは受け入れの限度に達してきているようであります。

このように本センター設立の意義は、本学における有機・無機廃液、洗浄・生活排水の処理のみならず、広く環境科学を軸とした環境保全に関する研究・教育を行うところにあります。

したがって、本センターの使命にかかわる分野は今後ますます拡大することが考えられます。

しかるに、現在本学の本センターは学内共同利用センターでありますので、予算も十分ではなく、人事面、管理面に不自由を致しており、特に研究面においては研究費の裏付けがなく、事実上計画的研究を行うことは不可能であります。前述のように現在は幸いに財団の研究助成金を得て研究活動を行っており、今後も文部省科学研究費ほか研究費の獲得に努力を要するのであります。

すなわち、本センターが、今後一層研究と指導者の技術の向上を図り、その使命を十分に達成するためには、省令施設への発展が最も望ましい将来の姿であると思われまゝ。しかしそのためには、これまでの当センターの稼働実績を踏えた廃液・排水の処理技術のみならず、広く環境科学をベースにしたできるだけユニークかつ大規模な発想の研究構想を打ち立てることが必要でありましよう。

今日、目覚ましい発展を遂げつつある日本の先端技術・科学を背景にして、全国的に最高の普遍的な関心をもって注目されているものの一つはコンピューターによる情報処理であり、一つは公害防止の対策でありましよう。

前者については、本学では先年省令施設として「総合情報処理センター」が設立されております。後者については当センターが先述のような他に類をみないユニークな研究構想をもった研究施設としての態勢を整え、もって省令施設化を目指してゆかねばならないと思ひます。

万葉にでてくる「みおつくし漣標」とは通行する船に通りやすい深い水脈を知らせるために立てた杭であります。本センターが全国に先がけて環境保全科学の最も深い水路となり、その「みおつくし漣標」の杭を打ち立てるべく、明確なる新規格の研究態勢を構えてゆかれるならば、必ずやいつか省令化の夢もかなえられることと思ひます。